

困ったことだ：

なぜ我々は知的に劣化してきているのか、その将来に対する意味は？

エドワード・ダットン&マイケル・ウッドリー・オブ・メニー著

インプリント・アカデミック 2018

書評者：アルドリック・ハマ（日本語訳：発信する会）

ウッドリー・オブ・メニーの前著『西欧のリズム』（Council for Social and Economic Studies, 2017）は、西欧の人々の全般的な知性の向上と劣化について、概観を述べている。著者が資料としたのは、ブリタニックスの歴史・行動・心理・遺伝表現型に関するデータだった。（英国人および海外に植民した英国人の子孫のこと）本書はエドワード・ダットンとの共著であるが、現在、全般的な知性が劣化しつつあるという従来の主張をさらに詳説し、加えて、前著『西欧のリズム』では使わなかったデータでその証拠を補強している。そして、さらに進んで、劣化の原因を分析し、現在の傾向がこのまま進んで行くと西欧文明はどんな事態に立ち至るかを明確に予測し、この知性劣化を食い止めるためには、あるいはせめて遅らせるために、どんな対策が可能であるかを分かりやすく述べている。

深く考えたことのない読者は、平均的知性が劣化していると聞けば奇異の念を抱くだろう。西欧文化圏では、どんなに平凡な人々でもスマートフォンを持ち、パソコンを使って、インターネットを検索する初歩的な技術を理解しているのであるから、知性が劣化しているとはなかなか信じがたいものがある。また、我々はこのような機器の仕組みを完全に理解しているわけではないが、毎年毎年性能が向上し、複雑なものになって行くことは、幾何級数的な進歩を遂げていると言っても過言ではあるまい。二三世代前と比較してみると、大学を出た人の数は増えているし、自然界を観察する場合にも、かつてのような「迷信的・宗教的」な角度から眺めるのではなく、多くの人々が「科学的かつ分析的」な見方をすることができるようになってきている。（本書はそのような合理的な見方を「科学的な眼鏡」と呼んでいる。それは、現代人が以前の世代の人よりも健康的で裕福な生活を送っていることに起因するという人もいるようだ。そうすると、人間の知性は決して劣化してはおらず、むしろ向上していると言えるかも知れない。

しかし、本書の指摘によると、そういう主張は、重要な所で論点がずれているとのことである。共著者二人（ダットンとウッドリー）は逆に、全般的に知性は劣化していると論証する。しかも、産業革命以来一貫して下落しており、特に顕著な事実として、科学やテクノロジーの分野で「重要な改革」に貢献した「大改革者」やエリートの天才が減り

つつあることである。かつては、こういう人々が、電話やワクチンを発明して、人類の生活に根本的な変革をもたらしたものだだったというのに。知性が全般的に劣化し、将来の社会全般に暗い影を落としていると聞いただけで驚かすにはいられないが、さらに、共著者は、高い IQ（知能指数）を持った天才が減り、そのせいで天才による改革が行われなくなってしまったことが、西欧文明の諸悪の根源だと見ているのである。共著者は、将来、西欧文明が現在のレベルを維持することも難しくなるのではないかと疑念を呈している。

もちろん、それを否認することはたやすい。知能の指標である IQ テストのスコアは、二十世紀の間、一貫して向上を続けてきた。それは先進国の場合でも発展途上国の場合でも同じであり、これは一般にフリン効果と呼ばれている。ところが共著者は異を唱える。決して、全般的な知性が向上しているのではなく、特定の、狭い範囲の認知能力が向上したように見えるだけだというのである。共著者はさらに進んで、こういう狭い範囲の認知能力は、全般的な知能とは関連性が極めて薄く、むしろ、環境を操作すればすぐに変わるものだと指摘する。つまり、練習すればスコアが改善されるのである。栄養状態が改善され、普通教育が普及したことが、IQ テストのスコアが向上する一因となった。しかし、向上したのは、本質的な認知能力とはほとんど関係のない能力の分野だけである。

過去の学者の中には、知性が次第に劣化しているという事実に気づいたものもいた。そして、その原因は、IQ の基礎となっている対立遺伝子が同時に減少しているからだという仮説が立てられているが、遺伝学的な補強証拠は出ていない。最近、遺伝子の変異が、知性の指標の一つである学業成績と関連があるという大規模な研究成果が提出されており、共著者はそれを使って持論を展開している。たとえば、アイスランドの国民を例に取ってみると、この八十年間、学業成績の向上につながる遺伝的変異の発生は頻度が下がっていると言う。さらに、青銅器時代の遺跡から発掘された古代人の DNA の研究成果をも共著者は例に挙げている。そして、IQ の向上に寄与する遺伝子の劣化は十九世紀から始まったが、それ以前には徐々に向上していたということを証明する。知性と関連する多くの遺伝的変異が特定されるにつれて、ヨーロッパ以外の地域で発掘された古代人の DNA が、それぞれの人種・民族の IQ が長期に渡ってどう変化してきたかを示してくれることになりそうだ――他の人種・民族も、同じような IQ の変遷を経験して来たのだろうか。

共著者は、産業革命末期以来「大改革者」および「大改革」が衰退していることを目して、全般的な知性が劣化していることの証拠としている。共著者は、このことを論証

するために、三つの異なった資料を使っているが、「大改革」の定義および大改革と小改革の違いはあまり明確ではない。昔から、小改革は大改革の付随的な存在に過ぎないと言われていた。大改革であっても、専門家にしか存在が知られていないものでしかし革命的なものの中には、調査しても見逃されてしまうものもあろう。たとえば、CRISPR-Cas（短い RNA 鎖と、効率的な DNA 切断酵素からなるリボ核タンパク質複合体）のような遺伝子編集の新しい方法は小改革であり、以前から遺伝子工学で使われてはいたがあまり精密なツールではなかったものを手直ししたものに過ぎないと主張することには無理があろう。CRISPR-Cas は、むしろ大改革であると考えた方がよいのではなかろうか。なにしろ、遺伝子が介在する病気の予防と治療には広範な効果を発揮するのであるから。こういうツールは、現在のままで、あるいはもっと手を加えれば、効果的なツールとして使えるようになるかどうかは今の所まだ分かっていない。使えるとなれば、その用途は、遺伝子を編集して遺伝子関連の病気の治療に使うことであり、また、遺伝子と密接に関連する肉体的機能・認知機能を改善することなのである。研究者たちはこのテクノロジーを生きている胚に使うことをためらっているようだが、そのせいで、このようなテクノロジーがどの程度安全で効果があるかが明確にならないのである。小改革を広範に適用して行けば、やがては大改革の領域へと入って行くことになるのだろうか。したがって、大改革と天才がだんだん存在しなくなっているというのは、極めて主観的な基準で言っていることになるだろう。

本書には、Mankind Quarterly の読者には周知のデータや概念を豊富に使っている。しかし、それは、進化遺伝学や人格理論のような論題に慣れていない読者にとっても理解しやすいデータであり概念である。本書は全般的な知性が劣化していることを論証しているが、なるほどと考えさせられる問題提起をしている。しかし、私（書評子）がもっとショックを受けたのは、さらにもっと考えさせてくれる分かりやすい実例を挙げていることである。魅力的な実例は、コンコルドが使われなくなったことである。超音速機コンコルドの登場によって、ロンドンからニューヨークまで、わずか三時間半で飛べるようになった。通常は八時間かかるのだから大変なことである。コンコルドに乗れるのはトップクラスの金持ちだけであるが、それでも、共著者の言葉を借りれば、「素晴らしい大躍進」であり、「既存のテクノロジー」（小改革）をちょっとアップデートしたというレベルのものではない。2003年にコンコルドが墜落してからというもの、商業ベースでの超音速輸送は芽を摘まれてしまった。それ以来、大陸間飛行の所要時間はいささかも短くなっていない。共著者の示唆する所によると、その第一の理由は、

人類がもはや商業ベースでの超音速輸送を開発し維持するだけの認知能力を持たなくなったからだというのである。

そればかりでなく、共著者の指摘によると、コンコルドが姿を消したのは、究極的には「無能」のせいだったと指摘する。（もっとはっきり言えば愚かさのせいだった）2000年にはエアフランスのコンコルドが凄まじい事故を起こし、乗員乗客は全員死亡、地上の無関係の人を四人道ずれにした。これは、コンコルドの前に離陸した飛行機に間に合わせの修理をした所、その破片が滑走路に落ちて、コンコルドに当たったことが原因だった。この事故以前には、コンコルドが死亡事故を起こしたことはなかった。このテクノロジーそのものは、三十年間有効だったと共著者は指摘する。無能が原因だった、もっと後になってから起こったのはボーイング 737Max の事故だった。複雑なシステムには、これでもかというほどまでにまさかの場合に備えた代替装置が取り付けられている。それを考えると、テクノロジーの破綻に起因すると思われる最近の事故のうち、大半はテクノロジーそのものに責めを負わせるべきでなく、理解力のない技術者のせいで生じたものではないのかという疑いを抱かずにはいられない。

本書の主眼となるメッセージは、「西欧は成功したがゆえに失敗することになる」というものである。このことは、昨今の情勢を眺めてみるとうなづけるものがありそうだ。就中、米国が騒乱状態に陥っていることがその典型だ。ヨーロッパの国々での研究によって、産業革命後の人類は知性が低下しつつあるのではないかという疑念が呈出されている。それと呼応するように、「反理性的なイデオロギー」が広まっている。それは例えばナショナリズムである。ナショナリズムの例として本書が挙げるものは、たとえば「民族の文化」こそがロマンティズムだという煽動であり、また血や国土や言語や歴史を共有する人々がそれを絆として、団結しようという呼びかけである。同時に、知識階層だと思われる人々も問題だ。チャールズ・マレー はこういう人々を「認知エリート」と名付けたが、彼らもまた反理性的なイデオロギーに毒されている。それは例えば、生物学的な現実を無視して、生活のあらゆる面において結果の平等を期待し、要求までしようという考えである。特に愚かで国論を分裂させそうな理論は、「性差別」と「人種差別」さえなければ、万人は能力的にも平等だという考えである。だからこそ、こういう差別は、時代遅れの全体主義の手法を使ってでも根絶しなければならないとこのテの人々は言うのである。なんのことはない。ヒトラーやスターリンに学べというわけだ。驚くなかれ、共著者は今後だんだんと、社会的エリート、政治的エリートの中に、このタイプの極端な考えを持つ人が増えて行くだらうと予測しているのである。読者はまさかと思うだろう。「科学的な眼鏡」で世界を眺めるようになった西欧の人

々が一体どうしてそんな非理性的なイデオロギーの浸透を許すはずがあらうかと首を横に振るに違いない。

たとえば、行動遺伝学の分野では、遺伝子と行動との関係を認めることに反対する傾向が後を絶たない。そして、人間の遺伝子を操作することに対しては、今なお法的な制限がある。しかし、このテクノロジーは、個人の健康を改善することに大いに寄与し、もっと広い目で見れば、人類の福利に素晴らしい貢献をすることになるのだ。たいていの西欧人は、伝統的な宗教概念（特に米国人）やポストモダニズムの非理性的なイデオロギー（特に知識人）に影響されて、遺伝的に修正を加えて、肉体的知的な機能を向上させた胎児などは、考えるだにおぞましいと拒絶反応を示すのである。実際には、遺伝的な病気を排除するためには、遺伝子操作が効果を発揮するというのに。

西欧ではこのように、胎児（胚）の選別および遺伝子操作に対して、疑似的な宗教の影響を受けた形而上学的な罪悪感が強いが、中国では、今の所、そのような傾向は見られない。中華人民共和国は高齢化が進み、かつ人口全体は減少しつつあるという問題を抱えているせいだろうか、生殖細胞の保存と改善に関しても、人口統計学的な観点から考えて来たようだ。中国政府は体外受精を実行するに際して、着床前に遺伝子診断を行うことを推進しておりさらに、科学者に対して、西欧よりも優れた遺伝学的な改革を達成するように奨励している。ところが東アジアの他の国々は、やはり高齢化と人口減少という問題に直面しているにもかかわらず、中国とは対照的に、西欧に追従し、剩れ遺伝的に異質の人々をできるだけたくさん受け入れている。それというのも、人種差別主義だと非難されるのが怖いからである。西欧諸国が外部からの移民をどんどん受け入れているのは、少子化という厳しい現実の前に、背に腹は代えられなくなったからであるが、実はこのことが、西欧諸国の知性が劣化しているキーファクターになっている。東アジア諸国の中にも、その轍を踏んで、同様に知性劣化という悲劇的なスパイラルに落ち込んで行く国が出て来るに相違ない。いや、すでにそうなりつつある。いずれにせよ、東アジア諸国の中には、本書が概要を示してくれる問題の根源を理解していない国があるように思われる。

ダットンとウッドリー・オブ・メニーが概説してくれた衰退の道をアジア諸国が辿って行くかどうかは、現在の所まだよく分からない。東アジアの国々は、西欧諸国に比べて大きなハンディを負っている。歴史的に西欧型の自由民主主義が深く根付いていないのだ。ところが、この自由民主主義から個人主義と平等主義のイデオロギーが生まれて、それが血縁と集団の絆に取って代わったのだ。しかしながら、この二つの特徴、血縁

と集団の絆こそは、東アジア諸国が自らの衰退という問題に対応し、西欧の衰退という世界の中で大きな役割を果たしていく可能性があるだろう。